

地域在住老年期にある人の世代間での生活状況と意識の変化の調査研究 —シニア大学受講者の2009年度調査と2013年度調査の比較検討—

Generational differences of living conditions and consciousness among older adults living
in the community

— The comparison between the people participated in senior university at Nagano prefecture
in 2009 and 2013 —

百瀬 ちどり
Chidori MOMOSE

村山 くみ*
Kumi MURAYAMA

目久田 純一
Jun-ichi MEKUTA

* 東北福祉大学

要旨

2012年以降、「団塊の世代」が老年期に入っている。「団塊の世代」は人口の多さとともに今後の日本の高齢社会に様々な影響を与えていると言われている。また、「団塊の世代」は性差による役割分業が確立した世代でもある。本研究は「団塊世代」の高齢者を含む地域在住の高齢者の生活状況と意識の変化の有無について、2009年度と2013年度のシニア大学参加者を対象に意識調査の結果を、性差による違いで比較検討した。生活状況で変化が見られたのは、1日の就労時間の延長である。男女共に8時間程度の就労者が大幅に増加していた。仕事を通じての社会参加が「団塊世代」の生きがいとなっている。生活の中での便利な機器の活用は増え、女性の就労を後押ししていると考えられる。反面、地域社会とのかかわりでは、男性は近所付き合いが減少し、女性でも地域活動への参加が減少している。

「団塊の世代」は、男性は「会社人間」として働き、女性はその夫を支えるというライフスタイルが多く、定年後は共に「個」としての活動を志向する傾向が強い。そのため集団を対象とする健康教室などの方法は今後、検討が必要であると考えられる。

【キーワード】 地域高齢者、団塊の世代、シニア大学、生活行動

はじめに

日本の高齢化率は2010年に23%を超え、超高齢社会に入った。特に戦後のベビーブームの時代に生まれたいわゆる「団塊の世代」は、厚生労働省の人口動態統計¹⁾では、1947年から49年の3年間に生まれた人は805万人を超え、2012年以降には65歳を迎える。その人口規模の大きさや生まれ育った時代と文化的な背景から、「団塊の世代」は高齢社会に大きな影響を与えると指摘されている。このことを踏まえ平成23年には高齢社会対策大綱も見直しが行われ、平成24年には新たな高齢社会対策が展開されることとなった²⁾。

「団塊の世代」はそれ以前の高齢者とは異なり、戦後の自由教育を受け、高学歴の者も多い。また、日本企業において「終身雇用制」と年功序列に特徴付けられる「日本的雇用慣行」が定着したといわれる。日本の高度経済成長とともに育ち大衆文化や消費行動の面で社会に大きな影響を与えてきた。産業構造の著しい変化の中で、地方から都市部に雇用労働者（サラリーマン）として移り住み、男性は「会社人」として安定した職業人生を送って来たと言われる。女性は、結婚前は71%の就業率であったのが結婚後は43%となり、仕事を離れている。結婚後、

夫はサラリーマン、妻は専業主婦という役割分業に基づく核家族を形成した世代でもある。そのことが女性の子育て終了後のパート就業や学習活動、ボランティアなどの地域活動に対する積極的な参加に繋がっているとも言われている。男性は「会社人間」として職業人生を歩んできたために地域との関係が希薄化し、定年後に仕事を離れた時に、地域に溶け込めないのではないかということも指摘されている(佐藤⁴⁾)。

このような「団塊世代」が老年期に入ってきている現在、地域の健康活動を含む社会活動や、繋がりには変化が生じているのだろうか。実際に「団塊の世代」の高齢期は始まったばかりであり、地域の繋がりや健康活動に変化がみられているのか、資料はまだ少ない状況である。そこで、「団塊の世代」の人たちとそれ以前の人たちの生活や活動に関する意識の違いがあるのかを調査した。2009年から老人大学(以下シニア大学)に参加する中高年者と関わってきたことを踏まえ、2013年までの5年間で参加者の生活に関する意識に変化があるのか。「団塊の世代」といわれる人たちとそれまでの高齢者と違う面があるのか、高齢者の生活意識について比較検討した。

I. 研究目的

2009年度シニア大学に参加していた地域在住の高齢者、2013年度にシニア大学に参加していた地域在住の高齢者の主観的健康感、健康生活習慣及び社会参加活動に対する意識の違いについて比較検討する。「団塊の世代」は男性と女性の役割分業が確立した世代ともいわれる。そのことも踏まえて、年代による男女別の生活意識の相違の有無を比較した。

これからの高齢者に対する健康指導、社会活動の検討資料とする。

II. 研究方法

1. 研究協力者

A県B市の福祉事務所が主催する2009年度及び2013年度のシニア大学の調査日当日の65歳以上の受講者、2009年度230名（男性102名、女性128名）、2013年度194名（男性76名、女性118名）を対象とした。質問紙の基本属性の項目に欠損のない2009年度185件（男性91名、女性94名）、2013年173件（男性74名、女性99名）を有効回答とした。調査項目、基本属性・主観的健康感・社会関連性指標・健康生活習慣について男女別に比較した。

2. 調査方法

質問紙を用い、2009年度、2013年度共に以下の手順で集合調査を行った。

- ①シニア大学主催者に研究の趣旨と実施方法について文書と口頭で説明し調査実施に関する許可を得た。
- ②研究の趣旨及び方法、倫理的配慮について受講生全員に対し文書と口頭で説明を行った。
- ③質問紙を1部ずつ配布し、記入の方法について説明を行った。
- ④質問紙の回収については主催者の協力を得て、回収箱を設置した。

3. 調査内容

①基本属性

基本属性に関する項目は、年齢、性別、家族構成、職業の有無、参加のきっかけ、同伴者の有無、半年以内の身近な人との死別の有無を設定した。「家族構成」は「同居あり」と「同居なし（独居）」、参加のきっかけは、他者からの勧めの有無について「勧めがあった」「勧めがなかった」、同伴者についても「同伴者あり」「同伴者なし」の2群に分類した。

②主観的健康感

「あなたは健康だと思いますか」という質問項目に対して「非常に健康」「健康なほうだと思う」「あまり健康ではない」「健康ではない」の4段

階で回答を求めた。「非常に健康」を4点、「健康な方」を3点とし、「あまり健康ではない」を2点、「健康ではない」を1点として集計した。

③健康生活習慣と医療受診行動

健康生活習慣等については、朝食の状況、栄養バランス、睡眠時間、喫煙、運動、飲酒、仕事時間とストレスからなる健康生活習慣実践指標と通院、入院、健康診断の受診状況を尋ねた。

④社会関連性尺度

社会関連性指標は人間関係の有無、環境とのかかわりの頻度を測定する尺度であり、5領域18項目からなる。それぞれの項目に対して「ほぼ毎日（いつも）」「週2回位（時々）」「週1回位（たまに）」「月1回位（いない）」の4段階の選択肢から回答を求めた。安梅3)の得点基準に基づき18点満点での配点で回答を計算した。

4. 分析方法

量的データは、各調査項目について単純集計を行い全体を把握した。統計処理は表計算ソフトExcelを用いてデータセットを作成し、SPSS for Windowsバージョン11を使用し集計解析を行った。単変量解析では、年代別の回答を性差で2群にし、t検定、 χ^2 検定により有意差の検討を行った。

III. 倫理的配慮

本研究では調査への回答は無記名とし、統計的に処理することで個人が特定されないようにすること、調査への協力は個人の意思に沿い、非協力でも何の不利益も生じないこと、研究以外にデータを使用することは無いことを文書と口頭で説明し、質問紙の提出をもって同意とした。

（本研究は松本短期大学研究倫理審査委員会の承認を得た。承認番号1304）

IV. 結果

1. 基本属性の変化

研究協力者の基本属性については表1の通りである。参加者の平均年齢は2013年で、男女とも若干の上昇が見られる。5年の経過の中で有意差が見られるのは男性の参加者の同伴者の有無のみである。参加のきっかけはどちらも自分で決めているが2009年度では他者から勧められて参加、複数で参加している傾向にある。

表1. 参加者の属性

| | 男性 | | | 女性 | | |
|---------------------|------------|------------|------------------|------------|------------|----------------|
| | 2009年度 | 2013年度 | | 2009年度 | 2013年度 | |
| 年齢：平均 (SD) | 70.37±3.53 | 71.28±4.45 | t=-1.395 | 68.70±2.93 | 69.33±3.32 | t=-1.395 |
| 同居者 (あり) | 90 (98.9) | 71 (95.9) | $\chi^2=1.507$ | 70 (74.5) | 81 (81.8) | $\chi^2=1.530$ |
| 死別体験 (あり) | 31 (34.3) | 29 (39.7) | $\chi^2=0.483$ | 29 (32.2) | 35 (35.7) | $\chi^2=0.255$ |
| 参加のきっかけ (自分で決めた) | 65 (73.9) | 49 (68.1) | $\chi^2=0.652$ | 70 (74.5) | 69 (71.7) | $\chi^2=0.268$ |
| 同伴者 (あり) | 38 (42.2) | 20 (27.8) | $\chi^2=3.631$ † | 54 (58.1) | 48 (48.5) | $\chi^2=1.767$ |

年齢についてはt検定、その他の変数については χ^2 検定 (df=1) を行った。()内は%

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

2. 主観的健康感と医療受診状況の比較

主観的健康感は4点満点として集計した。どちらの群でも主観的な健康度は高い状況にある。入院・

通院ともに有意な差は見られない。検診への参加も、どちらの年代でも高い割合を示している (表2)。

表2. 主観的健康感・医療受診状況の比較

| | 男性 | | | 女性 | | |
|----------------|-----------|-----------|----------------|-----------|-----------|----------------|
| | 2009年度 | 2013年度 | | 2009年度 | 2013年度 | |
| 主観的健康感：平均 (SD) | 2.80±0.60 | 2.86±0.53 | t=-0.722 | 2.89±0.54 | 2.88±0.54 | t=0.160 |
| 入院 (なし) | 79 (91.1) | 69 (94.5) | $\chi^2=0.434$ | 85 (91.4) | 89 (89.9) | $\chi^2=0.127$ |
| 通院 (なし) | 28 (31.1) | 19 (25.7) | $\chi^2=0.587$ | 35 (38.9) | 37 (37.8) | $\chi^2=0.026$ |
| 歯科受診 (なし) | 44 (48.9) | 40 (54.1) | $\chi^2=0.434$ | 48 (55.1) | 58 (58.6) | $\chi^2=0.238$ |
| 検診への参加 (あり) | 82 (92.1) | 67 (91.8) | $\chi^2=0.007$ | 82 (89.1) | 90 (92.8) | $\chi^2=0.770$ |

主観的健康感についてはt検定、その他の変数については χ^2 検定 (df=1) を行った。()内は%

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

3. 健康生活習慣の比較

健康生活習慣を見ると男性では栄養のバランスを考えて食べることに、有意差がみられる。2009年度参加者の方が、男性は栄養に注意している。女性では、有意差は見られないが考えて食べる

と答えている割合が2013年度の方が上昇している (表3)。

男女ともに1日のうちの6~8時間の労働時間を有している者で有意差がみられる。

表3. 健康生活習慣状況の比較

| | 男性 | | | 女性 | | |
|--------------------|------------|-----------|---------------------|-----------|-----------|---------------------|
| | 2009年度 | 2013年度 | | 2009年度 | 2013年度 | |
| 睡眠 (6~8時間) | 73 (82.0) | 68 (91.9) | $\chi^2=3.371$ † | 82(90.1) | 85(87.6) | $\chi^2=0.291$ |
| 栄養バランス (考えて食べる) | 47 (52.8) | 22 (29.7) | $\chi^2=8.816$ ** | 43 (47.3) | 55 (56.1) | $\chi^2=1.487$ |
| 朝食 (ほぼ毎日) | 90 (100.0) | 71 (97.3) | $\chi^2=2.498$ | 92 (97.9) | 95 (96.0) | $\chi^2=0.586$ |
| 労働時間 (4~8時間) | 12 (14.5) | 29 (59.7) | $\chi^2=34.506$ *** | 14 (17.7) | 68 (71.6) | $\chi^2=50.210$ *** |
| ストレス (少ない) | 34 (37.8) | 28 (37.8) | $\chi^2=0.00$ | 35 (38.5) | 28 (28.6) | $\chi^2=2.077$ |

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001 ()は%

4. 社会との関わりの状況の比較

社会関連性指標得点を見ると、合計得点では有意差は見られないが、男性では2009年度と比較し2013年度では近所付き合いが有意に減少している。

女性でも地域活動への参加が減少傾向にある。また、新聞を購読することが減少し、代わってビデオ等便利な機器の利用が上昇しこれらの項目で有意差が見られている(表4)。

表4. 社会との関わりの状況の比較(社会関連性指標)

| | 男性 | | | 女性 | | |
|-----------|------------|------------|---------|------------|------------|----------|
| | 2009年度 | 2013年度 | t値 | 2009年度 | 2013年度 | t値 |
| 家族との会話 | 3.91±0.46 | 3.81±0.58 | 1.206 | 3.67±0.70 | 3.75±0.69 | -0.767 |
| 家族以外の会話 | 3.48±0.75 | 3.39±0.75 | 0.778 | 3.55±0.77 | 3.63±0.64 | -0.714 |
| 訪問の機会 | 2.66±0.84 | 2.59±1.03 | 0.443 | 2.81±0.89 | 2.61±0.93 | 1.535 |
| 活動参加 | 2.31±0.89 | 2.20±0.89 | 0.753 | 2.32±0.83 | 1.99±0.80 | 2.799 ** |
| テレビの視聴 | 3.97±0.31 | 3.95±0.36 | 0.398 | 3.93±0.44 | 3.98±0.14 | -1.128 |
| 新聞の購読 | 3.96±0.33 | 3.93±0.41 | 0.406 | 3.94±0.43 | 3.79±0.73 | 1.699 † |
| 本雑誌の購読 | 3.03±1.01 | 3.01±1.02 | 0.122 | 2.80±1.14 | 2.63±1.08 | 1.071 |
| 役割の遂行 | 3.52±0.91 | 3.46±0.93 | 0.394 | 3.79±0.73 | 3.80±0.68 | -0.105 |
| 相談者 | 3.19±0.96 | 3.19±1.05 | -0.015 | 3.69±0.73 | 3.73±0.69 | -0.347 |
| 緊急時援助者 | 3.47±0.94 | 3.34±1.03 | 0.871 | 3.65±0.78 | 3.73±0.71 | -0.727 |
| 近所づきあい | 3.08±0.63 | 2.86±0.68 | 2.051 * | 3.06±0.71 | 3.08±0.60 | -0.179 |
| 趣味 | 3.38±0.61 | 3.30±0.69 | 0.857 | 3.36±0.65 | 3.44±0.55 | -0.948 |
| ビデオ等の利用 | 3.30±0.75 | 3.43±0.66 | -1.214 | 3.29±0.63 | 3.48±0.57 | -2.267 * |
| 健康への配慮 | 3.42±0.55 | 3.32±0.59 | 1.032 | 3.45±0.56 | 3.52±0.54 | -0.861 |
| 規則的な生活 | 3.34±0.56 | 3.38±0.48 | -0.454 | 3.41±0.64 | 3.34±0.55 | 0.825 |
| 生活の工夫 | 3.10±0.57 | 3.20±0.59 | -1.131 | 3.15±0.56 | 3.24±0.53 | -1.177 |
| 積極性 | 3.15±0.57 | 3.20±0.74 | -0.465 | 3.28±0.55 | 3.26±0.54 | 0.176 |
| 社会への貢献 | 2.90±0.65 | 2.97±0.70 | -0.681 | 2.90±0.64 | 2.98±0.47 | -0.935 |
| 社会関連性合計得点 | 59.16±5.50 | 58.55±6.78 | 0.625 | 60.04±5.97 | 59.97±4.97 | 0.092 |

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

V. 考察

一般に「団塊の世代」とは、1947年から49年までの3年間に生まれた世代のことをさす。この世代は、人数が多いこともあり競争力が強い反面、同世代での団結も強いとも言われている(三浦⁵⁾)。「団塊の世代」はその人数が多いことや現代の新卒世代に受け継がれる日本人の特徴を初めて有した世代とも考えられ、それゆえ、他の世代とは違う文化を作り出してきた。その世代が老年期を迎え、高齢者文化の新たな始まりとしても注目度が高い世代である。

2012年には「団塊の世代」が老年期に入る。2012年以前と以降のシニア大学参加者の、65歳以上にある人の生活意識について同一の質問紙で回答を得たものについて比較し、変化の有無を検討した。5年間で65歳以上の参加者だけを比較すると、参加者の平均年齢がわずかに上昇しているが、統計的な有意差は見られない。男性参加者の同伴者の有

無で有意差が見られた。2013年度の男性参加者は2009年度と比較して一人で参加している、自主的な参加型の人たちである。2009年度までのシニア大学は地域活動の担い手の育成的な趣旨もあり、地域から推薦され地区単位で参加している人が見られた。2013年度はその傾向が薄れ自ら学習活動を探して参加する傾向にある。自治体主催の高齢者向け学習活動も活発に展開されるようになり、シニア大学と同様の活動が営まれているため募集人員を縮小しているとシニア大学関係者は説明している。実際、2009年度の定員350名から2013年度250名となっている。

2009年度と2013年度の参加者を比較し特に有意差がみられた健康生活習慣と社会的な関わりの側面について述べることにする。

1. 主観的健康度と健康生活習慣

団塊の世代は健康面についての関心が高いといわ

れる。一方で、男性は会社人間として「モーレツ社員」という代名詞ができあがったように、仕事優先の生活を送ってきた人が多い。そのため生活習慣や食習慣の乱れが生じていた人も多く、「生活習慣病」という言葉もこの世代の代名詞とも言える。主観的健康感と医療受療状況については5年の間での差は見られない。団塊世代は健康管理面に関しては意識が高いといわれている。健康面での不安は医療受療行動に結びつきやすく、検診の受診率が高いのも特徴といえる。しかし、その一方で健康生活習慣において、男性では栄養のバランスを考えているかどうかで有意差がある。2013年度調査では考えて食べる人が減少している。これは、労働時間にも関係しているものと考えられる。男女ともに2009年度に比較し、2013年度では1日6～8時間の労働をしていると答える人が有意に上昇している。厚生労働省の「就労条件総合調査²⁾」によれば、65歳以上を定年とする企業の割合が上昇し、さらに定年後の再雇用制度や勤務延長制度などを取り入れる企業も上昇し高齢者の就業率は高まっていると報告している。定年後も就労の機会があることや、男性では特に「男は外で働くもの」という意識と仕事に対するの能力発揮に基づく自己実現意識が、就労を高めていると考えられる。家庭内での関係も影響し仕事に自分の居場所を探す、仕事意識を持つ人が多いのも団塊世代の特徴とも言える。そのような背景も労働時間の上昇に繋がっているとも考えられる(奥村⁶⁾)。女性の就業率の上昇の背景は、男性同様の自立志向が高い世代であり、それが役割分業の子育てや主婦業によって中断され、子供の独立とともに再度社会へ出る。ということや経済的な理由、農業県ならではの地域特性も背景にあると考えられる。高齢者の労働時間の延長は元気な高齢者の増加とも考えられ良い傾向とも考えられる。

男性が栄養について考えて食べるのが少ない理由としては、フルタイムで働く人が増えていることで、職場での昼食や付き合いで食事をする機会が増えていることも考えられる。仕事以外にも、家事を妻に依存し出されたものを食べる、という生活習慣が出来上がっていることも影響しているかと思われる。団塊の世代は家庭内での役割分業が確立した世代であり、専業主婦としての妻が家事を分担し男性は外で働くことに専念していたことの影響とも考えられる。

『団塊世代の男性のライフスタイル』に関する調査⁷⁾では、家族形態は夫婦2人暮らしが最も多く、夫婦二人で外食する機会を定期的に持つと報告されている。週に1回から月2,3回の頻度が多い状況である。外食の場合、栄養面を考えるより食事を楽

しむことが優先され、普段の生活の中にもそのような要素がないとはいえない。団塊世代が増えるにつれてこの傾向はますます高まると考えられる。女性では栄養バランスを考えることに有意差はない。家族の食事に対しては変わらない考えであるといえる。「団塊世代」の健康意識では、不調が有ればすぐに受診すると言う意識は高いが、不調にならない食生活への指導が重要である。食生活に関しては、食べることそのものに対する楽しみ方、考え方の変化と捉えた指導が大切であるといえる。

2. 社会とのかかわりについて

団塊世代はニューファミリーと言われ、それまでの世代以上に自分と家族を大事にする私生活主義の傾向が強い世代でもある。そのため男女とも自らの役割を特化することで活動領域と人間関係を狭めてきたと思われる、と奥村⁶⁾は述べている。さらに、特に男性の場合、長い期間を会社で過ごしているため、定年を迎えても家族との関係の持ち方、地域との関係の築き方は手探り状態になるとも述べている。2009年度と比較し2013年度では男性の近所付き合いが減少傾向にある。女性でも活動への参加が著しく低下している。この両者の傾向は、前述の就労との関係が否めない。フルタイムでの就労が上昇したことで男女ともに地域との関わる機会が少なくなったと考えられる。私生活主義という特徴を重ねるなら、地域活動より家族単位の活動を重視し優先している傾向といえるかもしれない。また、仕事を生きがいとして過ごしてきた男性では退職後も、それまでの技能や仕事に関連した活動を続けている人が多い。高齢者の仕事を続ける理由として経済的な理由もあるが、健康と生きがいも挙げられる。仕事に携わることが退職後の生活の健康維持や生き生きと生活することにもつながっている。

一方、女性では地域活動への参加で2009年より2013年では有意に減少している。それまで地域活動の実質的な担い手であった女性は、「団塊の世代」に入ると男性同様に高学歴な人も多く、子育ての後に再度社会に出る機会を見出した人も多い。あるいは専業主婦として家庭に居る間からも、趣味活動を広げ、そこからの社会活動の輪を広げていることも考えられる。そのため、地域活動に関する参加が低い状況であるが広く社会活動への参加と考えると必ずしも減少しているとは考えられない。女性ではさらに、生活の中で機器等の活用が上昇している。この点も女性の社会進出と切り離せないと考えられる。専業主婦として家事が仕事とされてきた時間から、便利な機器を利用して家事の時間を短縮し、その分を自由な時間として自分のために活用している

状況が推測される。それまでの高齢女性は機器の取り扱いが苦手という概念が持たれていた。しかし、団塊世代の女性高齢者は通信機器(携帯電話・スマートフォン等)やパーソナルコンピューターを専用に保有し使いこなしている。実際に別居子との交流頻度は、高齢女性では「ほとんど毎日」「週1~2回」が約半数であると報告されている(橋本⁸⁾)。この背景は女性たちが通信機器を使いこなしていることや、高齢者でも使いやすい機器の登場が関係していると言える。このような社会的変化も手伝い女性はより活動的になっていると推測される。この傾向は今後さらに強まると考えられる。女性の社会進出や機器利用を考えると、今後、様々な地域高齢者向けの情報発信や活動は機器の活用も取り入れて考える必要も検討する必要もある。

VI. 結論

今回、「団塊世代」が高齢期を迎え生活行動に変化が見られるのかを2009年度の高齢者と2013年度の高齢者の生活面の意識を性差で比較した。その結果、以下の点で変化がみられた。

- ①男女共に2009年度と比較し、2013年度は1日6~8時間程度の仕事をしている人が有意に増加している。
- ②社会生活面では、男性は2013年度では近所付き合いが減少し、女性では地域活動への参加が減少している。女性の機器利用が上昇している。

以上の結果を踏まえ、今後増加する団塊世代への健康行動の支援には、通信機器の積極的な活用や仕事と連動できる方向での検討が望まれる。

おわりに

今回の調査では、2013年のデータには「団塊世代」以外の高齢者も含まれており結果には限界がある。また対象者が限定されており、その点も研究の限界である。しかし、5年の経過の中で地域の高齢者像は変わりつつある。今後一層、その傾向は強まることが予想できる結果である。

「団塊世代」の高齢期は始まったばかりであり、資料は少ない。高齢者像に実際にどのような影響を与えて行くのかは未知である。しかし、2009年と比較しても生活状況や意識面の変化は確かに有ると思われる。今後も新たな高齢者像の実態について追跡し、健康支援の基礎資料として積み重ねたい。

最後に、本調査にご協力頂いたシニア大学関係者の皆様、受講生の皆さまに深く感謝致します。

引用文献

- 1) 厚生労働統計協会(2013): 国民衛生の動向、vol.69, No.5 p51-53
- 2) 内閣府編ホームページ: 高齢社会白書(平成25年度版)、(<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/gaiyo/indexhtml>)
- 3) 安梅勅江(2000): エイジングのケア科学ーケア実践に生かす社会関連性指標、川島書店、p.56-60.
- 4) 佐藤真一(2006): 団塊世代の退職と生きがい、日本労働研究雑誌、No.550、p 83-93.
- 5) 三浦展(2005): 団塊世代を総括する、牧野出版、東京
- 6) 奥村隆一(2006): 高齢社会における「共生の思想」ー団塊世代の地域共生 高齢社会時代の団塊世代、三菱総合研究所所報 46、p.142-154
- 7) 内閣府ホームページ: 平成24年度「団塊の世代の意識に関する調査結果」(概要版)、(<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h24/kenkyu/gaiyo>)
- 8) 橋本有里子(2006): 老年期における家族的役割、社会的役割と精神的健康との関連性に関する研究、関西福祉科学大学紀要 第9号 p117-130